

むところが正しき地位において理解されるであらう。と言へば座右に置いて顧みるべき提要の如きでもあらうか。

このことは内容の分析的な提示が最も明かに示してゐる。初期、中期、後期、ミノア時代を更に三分して、各期毎に必ず、建築、フレスコ、陶器、金工品、印章等等から外國關係、クロノロジーの順に述べられてゐる。それ等は何れも説明の程度を出でないが、その大部分をこの書のために書いた各期の家屋の原面圖二七と、各期の文庫集一七とは特色であるが、それより大なる特色は發掘發見地點を各期毎別々に記した地圖二四とこれも各期毎にまとめられた發掘發見地名表八〇餘頁であらう。この地圖も地名表も適宜に散布してはあるが、此等だけで全書の四分之一に當り、ここに著者の眞摯と親切とを充分に見ることができよう。此外、寫真四十三頁この内には多くの景觀圖を含んで、現代クリート人やその風俗を古代と比べてゐる所二六七頁などと共に、流石に長く此島に住んで、此島を愛した彼の傾向を示してゐる。

ミノア時代以降については、この時代にはクリートはギリシア文化圏に屬してゐたがために、ただその地方的特色を記するに止める(序論)とて、多くの表や地圖ともで僅か八〇頁を、ミノア時代と同じ順序の書き方で充してゐるのは、もう少しギリシア文化との關係もあればと、一寸物足りないが、本書の一貫した記述法にはかなつてゐる。

全體を通じて新論卓説はないが、問題となるのは年代であらう。ミノア時代の年代設定は主として埃及との關係によるものである

が、此時埃及學者でもある彼は甚だ好都合である。恐らく各期の外國關係と年代及び三〇一頁の對照年表とは彼の積極的な考が入つてゐやうが、それとても甚だ慎重で、クリート島を東、中、西部に區分して、甚だ妥當な結論を出してゐる。しかし妥當は次第に妥協を許して、區分が錯綜する憂があるから、彼が望む如くに(序論、またその三十一頁參照)新なる原理による年代の出現が望まれるのである。

何はともあれ、堅實と滋味とがこの書の讀後感であり、一定の時代の文化の概述といふ彼の目的は充分に、そしてたしかに此迄のどの書よりも達せられてゐる。そして次にこの尙ほ春秋に當り著者に期待するのに、この最良の *An Introduction* の後に來るべきものである。(Methuen & Co. London. p.p. 400 (邦價貳拾八圓五拾錢) (村田數之亮)

### 一七八九年の大恐怖

G・ルフエーブル著

Lefebvre, G.: La grande peur de 1789

Les paysans du Nord pendant la Révolution française

(1925)の著者として令名既に高く現にバリの文科大學の教授としてマチエなき後の革命史研究を雙肩に荷負ふ著者は一九三二年本書を公刊する事により、日進月歩の革命史研究に新天地を開拓したのであつた。

「人民は口の邊迄水に浸りながら池の中を歩んでゐる人にさも似たり。若し一片の土でも沈下し少しのさざ波でも立てば杖が立たなくなり沈んで窒息するであらう」とテースがそのアンシャン・レデームの中で書いてゐる平民階級の描寫は簡略を極めてゐるとは云へ、その結論は依然として價值がある。大革命の前夜に於て佛蘭西人の大多数にとつて大敵は是れ飢饉であつた……田舎に關してテースの此の判斷はテースの弟子と自稱する弟子によつてすら非難せられて來た……而し事實に於て約三十年來追求せられたカイエの批判的研究はそのカイエが眞實である事を證明した。又深く掘り下げられた、且農民の狀勢に對して向けられた探究はテースこそ正しいと云ふ事を證明した」(p. 87)とその冒頭に於て斷然テースを支持するに至つた事は Anlauf 以來最近 Mornet (Les origines intellectuelles de la Révolution française 1715-1787. 1933) に至る迄テースを駁撃する事こそ革命史研究の當道と考へられてゐた趨勢に鑑みるならば誠に皮肉な事と云はねばならぬ。それにも増して重大な事は第一章の標題「一七八九年に於ける田舎」が之を示してゐる如く革命の發端の歴史に舊制度末の農村、農民が主題として取り上げられるに至つた事であつて實に破天荒と云はねばならぬ。

著者は舊制度末、佛蘭西農民は土地の重大な一部を所有してゐたけれど佛蘭西の土地制度の本源の性格の爲に自己の耕地のみで一家を支へ得るものは農村人口の一部分に過ぎなかつた。加之舊制度末二〇年間に約二百萬人の人口増大があつた事と相續分配に

より土地問題はその末年實に重大化してゐた事を述べ、此等の充分なる土地を持たない大多數の貧農は或は商業、機械業、に従事し、あるひは日傭人夫として生活の足し前を求めてゐたが不幸、舊制度の末年總ての災厄は一度に狂奔した。即一七八七年の穀物自由取引の勅令、一七八八年の凶作によるパンの價の高騰、一七八六年の英佛通商條約によつて惹起された八八年の工業危機は大多數の農村人口から足し前の職を奪ひ將に飢饉線上に追ひつめるに至つた事を説明し、オーゼールの立場 (Les caractères généraux de l'histoire économique de la France du milieu du XVI<sup>e</sup> siècle à la fin du XVIII<sup>e</sup> siècle. Revue Historique 173. 1934 p. 327) とは對照的に農民の貧困より出發してゐる事に注目しなけれ

ばならない。  
かゝる如き「飢饉」は一面には當然を食及び流浪の人を増大したのであり、仕事を求めて失業業者達は町々村々を遊蕩して移動した。彼等の風紀亂れ、其の數愈々多く、漸では強盜の中に參加するや又殊に收穫が近づいた時に恐怖は天翔けるに至つた。

亦一面「飢饉」は當然一揆を激發したのであつて八九年の三月から四月にかけて全國的に一揆は數へられる。かゝる一揆は經濟的重壓を加へつゝあつた貴族に向けられたものとは云へ入々は一揆により自分で恐怖を作つてゐたのである。

著者は筆を轉じて革命の發端は特にルイ十六世のアメリカ戰役參加により、激化された財政危機を切り抜けんとする大臣達の提案なる貴族課税問題に端を發し、眞實之れを受けんとする意志な

き貴族が主に迫つて三部會を招集せしめた事、即革命の濫端が全然貴族的であつた事を強調する。此所に「貴族の陰謀」なる理念が根ざす所以があるのである。更に舊制度末の司法制度、軍陰制度の弛緩喪失は一層社會不安を助長すると共に都市農村共に民衆をして自衛せしめる所となつた。以上の如く LeFebvre は一七八九年の農村の危機を分析し「大恐怖がよつて生ずべき社會經濟的地盤を解明する。而し之だけでは大恐怖は現出されない。それが地方的恐怖に止まらず全國的運動として爆發する爲に實際政治より發生した第三章の「貴族の陰謀」なる要素が必要となるのである。

「貴族の陰謀」は「貴族の計畫や手段に就て作られてゐた理念であつて現實のものではなかつた」(p. 70) けれど土地に依存する貴族階級が資本主義の發展による貧困化を農民に轉化せんとする經濟上の封建的反動運動と將に崩解に瀕する王權に對して立ち上り、支配權を獲得せんとする貴族の政治運動とが平行運動として發展したが故に此の理念は農民によつて一層切實性を帯びるに至つた。而も「萬人の目は議會と主府とに注がれ、萬人の耳はそれから生ずる意見や報知を餓鬼の様に受けてゐた。かくして其所に於て流布されてゐた風評が本質的軍大性を持つたのである」(p. 71) かゝる譯でパリの七月十四日の事變は農村を主體とする革命史にも極めて大なる意味を持つものであり、此の事變の報知は刻々地方の諸都市より農村へと傳へられ、地方都市に於ては「第三階級」と叫ばねば武裝民軍によりその生命が危いと云ふが如き階級的團結を生ぜしめ(p. 106) 一方農村に於ても反動として反亂が勃發す

るに至つた。而も「此等の農民の行爲、即一七八九年七月の農民叛亂に於て貴族やブルジョワの煽動は枝葉の行動しか惹起せしめ得なかつた。彼等が干渉するには、農民に満ち／＼て充分なる理性があつたからに他ならない」(p. 117) と農民の態度が自主的であつた事を強調する、從つて「農民一揆が本質的に春のそれと異つたものでないとしても、春の一揆から區別されるのは「貴族の陰謀」及びパリの暴動の明らかな影響の下に、反領主的性格を強めるに至つた事であり」(p. 118-119) パリの風評を耳にするや Boage, Franche—Comte, Alsace, Maconnais, 等に於て極めて自然的一揆が勃發し貴族の城砦を占領し古證文を焚毀するに至つてゐる。かくの如き第三階級の、陰謀に對する反動としての擾亂は今度は逆に愈々不安を増大する事になつた(p. 116)。既にパリに於て實現されてゐた如く現實の政治に根ざす貴族の陰謀と實際の社會狀勢に根ざす brigands の恐怖との人々の精神の内に於ける結合は斯様にして促進されてゐたのである(p. 107-108) と著者が地盤的社會不安が政治的なものによつて一層連進激化され將に「大恐怖」となつて爆發すべき發火點に迄狀勢が醗酵された事を強調する。即此所に LeFebvre の政治史章重の態度が窺はれるのである。

次に第三章「大恐怖」に於て著者は大恐怖の性格を證明し大恐怖は革命家、若しくは反革命家の陰謀と在來は考へられてゐたが何等かゝる根跡認められないと農民の自治的革命を暗示し又在來の著作者は大恐怖をパリの周邊から遠心的に波及したと説くのであるが事實は之と異り「大恐怖」には多くの起源の點があり且つその

進行は氣まぐれで時にはバリに向つて進んで行つたものすらあるのである (p. 166)。亦在來大恐怖は到る所時を同じうして爆發したと人は斷言する。而して之も今日研究の結果誤りなる事が明らかとなつたとその性格が極めて複雑である事を實證的に論述する。

結局叙上の如き發火點に到達せる社會不安は偶發的事件によつて爆發したのであり、始源的恐怖は市から市へ村から村へと傳へられ、皆恐怖におびへ、武裝して立ち上つたのでありその全國的傳播が、大恐怖を形成した。

「二つの始源的恐慌は貴族の陰謀に對する平民の反撥と密接な關係に於てあつた、だからして佛蘭西の政治的狀態と結びつけられるのである……」(p. 168)「他の地區に於ては恐怖の起源に見出したのは經濟的事情だから流浪人の恐怖である……」(p. 169)は著者の史觀を物語つて餘あらう。

最後に Lefebvre は繰返して「此の「大恐怖」起源の中に何等の陰謀の根跡はなかつた……」(p. 170)事を強調し更に「此の恐怖の反動は農村に於ては殊に貴族階級には不利益になる方向をとつた。農民を集合させる事によりその反動は農民に自己に對する自覺を興へ封建制度を破壊しつゝある攻撃を強化した……、かくして大恐怖が注目を引く價值があるのは唯に奇妙な又繪の如き性格であるに止まらない。大恐怖は八月四日の夜を準備する事に貢獻した。而も此の資格で大恐怖は我々國民の歴史の最も重要な挿話の數に入るのである」(p. 247)と結論する。

Lefebvre は其實證研究により本書に於て極めて手際よく農民を主體とする革命の發端史を敘述したのであり、彼が二年後 Cahiers de la Revolution No. 1 (1934) の卷頭論文「佛蘭西革命と農民」に於て「佛蘭西革命は複雑なる事實である事、唯一の革命ではなく數多の革命がある」事を強調し「在來の(研究の)描寫は全然完全なものでもなければ忠實なものでもない何故ならば農民が云はば一向それに登場せしめられてゐないからである……」と慨嘆し「その起源に、その經過に、その傾向に、關してそれ獨得の自治を所有する農民革命が存する事である……」と (p. 12) 佛蘭西革命の框の内に於て發展した農民革命の重んずべき事を絶叫するに至つた母體を本書に見出す事が出来るのである。

とまれ在來の革命史研究がブルジョワジを以て唯一の革命の荷擔者として議會中心主義の歴史であつたのに比し革命と云へば流血慘事を思ふ、暴力・民衆の武裝・暴動・を主題として革命を考へるに到つた功績は大きく、殊に農民なる新分野を革命史に開拓した業績は不朽である。

紹介するには既に舊くなつた本書も其所説は依然として新しく革命史研究の前途に不滅の光明を投ずるであらう。(Paris. Armand Colin 1932 邦價約四圓) (豊田 堯)

## 世界地理

石田・武見・渡邊編

世界は今や一大轉換期にある。過去數百年に亙り利己主義と暴